



福井 敦男

花壇の花

朝日の中で、原付バイクのエンジン音が軽快に響く。今朝も母がパートに向かうのだ。年齢六十八。雨の日も風の日もバイクに跨り、パートに行く。いくら働くのが好きだといっても、母の頑張りにはまったく頭が下がる。

母のパート先は町の印刷工場。社員数は二十人くらい。一階が印刷場で、二階が事務所、三階は会議室と食堂になっているらしい。母はここで、ただひとりの清掃員として働いている。各々の部屋と階段や廊下、トイレの清掃が毎日の主な仕事。それから、裏庭にある小さな花壇の水遣りも……。もっともこれは、花好きの母が勝手にやっていることらしいのだが…。

酷暑だった去年の夏、事故は起こった。母が階段をモップ掛けしていると、若い男性社員が後ろから勢いよく駆け上がってきた。気づくのが遅れた母は、危うくぶつかりそうになったが、すんでのところで避けられたそうだ。が、次の瞬間にバランスを崩し、数段下

の踊り場まで転がり落ちたらしい。「あ痛たた」と思ったときはすでに遅く、足首を捻挫していた。日頃から階段掃除は危ないと思っていた母の危惧が、その日現実となったのだ。昼過ぎ、足首に湿布を貼った母が帰ってきた。家で安静にしていると、驚いたことに、夕方、印刷工場の社長がやって来た。

「この度は、本当に申し訳ないことをしました。日頃、安全・事故防止を、口を酸っぱくして言っているのにこんなことになってしまったて…。あの社員も反省していますので、私に免じて、どうか許してやってください。すみませんでした」と、母に頭を下げたのだ。「いえいえ、大したことはないですから」と母は恐縮しきり。

社長は「今は大変暑い時期ですから、この際ゆっくり休んでください」と、見舞金まで差し出した。うだるような暑さの中、帰っていくその後ろ姿をありがたく見送る母だったが、母には母で、そうゆっくりと休んでもいられない気掛かりがあった。

結局、母は四日休んだだけで復帰した。復帰の日、総務の人たちに「迷惑かけました」と挨拶を済ませた母は、さっそく普段どおり仕事に取りかかった。すると、すぐに気づいたことがあったらしい。それは、「うしろ通ります」とか、「ちょっと失礼」とか、「ごめんよ」とか、皆が作業する母の側を通るとき、

必ず一声掛けてくれるようになったのだ。母も「ありがとう、こんにちは」と気持ちよく言葉を交わし、階段の掃除も安心してできるようになったとのこと。どうやら、母が休んでいる間に社長が皆に話しておいてくれたらしい。

昼休みとなり、母は灼熱の太陽を見上げながら、気掛かりだった場所に急いで向かった。花壇だ。花壇の花は大丈夫だろうか、この暑さで枯れているのではないだろうか、早く水をあげないと…。

心配した母が、いざ花壇に着くと「もう、大丈夫なんですか？」と、社長が花壇の花に水を遣っているところだったらしい。驚いた母が「は、はい。心配かけました」と、頭を下げると、社長は「あなたが毎日水を遣ってくれていることは知っていましたから」と、照れくさそうに頭を掻いて、さらにこう続けたという。

「会社も花も同じです。思いやりを持って接してやれば、イキイキします。皆に目を配り、皆が働きやすい環境を整えることも私の大切な仕事です」

それを聞いた母は、訳も分からず涙がこみ上げてきたそうだ。花壇の花はどれもこれも元気に天を仰いでいる。

どうやら母は、素敵な会社に勤めているらしい。